

話しをするにしろ、書くにしろ言葉は自分の思う事が正確に伝わってこそ価値のあるものです。書かれたものは後世誰が読んでも理解できなければなるまい。例えば、デパチカと言えはデパートの地下の事と今は分かりますが数十年先に注釈無しに理解されるかどうかは解りません。特に我々宗教人にあつては奥が深い内容を簡略して話をする事が多く、かえって中身がぼけてしまう事があります。分かりやすく説明し様とする事が逆に本位を失する事に成りやすいのです。例えば顔を分解し、眼・鼻・口・耳等々、それぞれ単独に説明し集合させても顔に成らずと言う事です。

昔は 三つ子の魂百まで」といい、岸見一郎氏は 自分についての見方、世界についての見方は十歳で止まってしまうと、アドラーは四五歳で止まると言い、その人のライフスタイルが決まる年齢を推察してみえます。子供は三歳頃から自我に目覚めて往きます。自己主張が強くなってくるのです。

在宅ホスピスの先駆者、内藤いづみドクターは悔いなく死にゆくための三原則として 最期を過ごす場所を自分で選ぶ、自分のやりたいことを大事にする、恐怖や痛みや不安を我慢しない」

寂室元光禅師の語録 大矢義高氏訳) によれば 妄念を即座に取り払えばそこには澄みきった鏡の面のよう、さすれば浄土の三尊は、ただちに姿を現じたもう、もそも、ちまちまと西方を拝んでばかりいては、花咲く池も躍あざめく木々も見えはせぬだろう。」と、又、禅師は 依道の修行者は、先ず身・口・意の働きを慎重にし、貪・瞋・痴を除き去り、名声を浮雲と同じく見、利益を糞土のごとく棄てねばならぬ。言葉を吐くときは詐いつわりやでたらめを去るようにし、行動に出る時ときは着実さと折り目正しきを旨とし、世上のさまざまあやふみな悪況あくけいも、すべて夢まぼろしや空花の世界の事と見て取り、然しかる後に、自己の未だ明らかならざるを以って、常に自ら勉勵せよ」

古人が 我を生む者は親なり、我を成す者は師友なり」と、私の人間形成は師と友であると言う。芸事等の習い事や教育の場の場での先生はみえますが人生の歩あゆみを教えてくれたり、手を携たずさえて苦楽を共にできる友達はなかなかいません。

山田無文禅師が中国に行かれた時に 胸は祖国に在り、眼は世界に開く」と掲げてあつたそうです。今や大学の卒業式で国歌の斉唱をしないのが当たり前なのですが国旗の掲揚と合わせ日本国民である自覚が足りないのかと思えるのです。オリンピックなど見れば優勝すれば国の榮譽を皆で讃たたえ、その国の国旗を掲げ国家を斉唱するのです。国旗国歌の無い国はありません。無文禅師は 大間を尊重せよとおしえられると自分を大事にすることだと受け取り、個人

の権利と自由を守れといわれると、俺が何をしてもかまわんことだと考え、自我を自覚せよとおしえられると、俺の幸福を俺がしっかりつかむことだと解釈するのであります。そしてきわめてせまい個人主義、利己主義者ばかりが育たのではないでしようか」と禪師は「大間尊重」とはこの世の中に、一人でも粗末にされる人、見捨てられる人、さげすまれる人があつてはならないというこじとでしよう。個人の自由と権利を守れとは、人さまの自由と権利をおかしてはならんというこいとでしよう。」

二十八年六月一日

善入院油掛地藏尊